
東方土着争奪(仮)

gray-zone

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方土着争奪（仮）

【Nコード】

N1460V

【作者名】

gray-zone

【あらすじ】

ある日、諏訪子の様子がおかしくなった事に気づいた早苗。いつものように日常の1ページなのか。それとも大きな異変の前触れなのか。

？

0

「知ってる？ 最近ね、普通では感知できない程度の極微弱な地震が多発してるのよ。博麗の巫女や幻想郷にいる人外でも気づいてないんだけど」

「それほど微弱なら……」

「本当に無関係と思う？ 大きな異変の前触れと思わない？」

「……」

「単刀直入に言うわ。幻想郷のために神として死んでほしいの」

1

幻想郷にある守矢神社では紅葉した葉が宙をひらひらと舞っている。ここだけではなく幻想郷自体がそうになっているのだが。神社の境内では緑色の髪をした巫女がせっせと掃除している。隅の方でデフォルトされた目玉が二つついている茶色のハット帽をかぶっている少女が石垣に腰掛けて巫女をただただ見つめていた。

2

「よし、境内のお掃除終わりました。諏訪子様、お昼にしましうか」

守矢神社の巫女、東風谷早苗は明るい声で隅に居る少女に呼びかけた。

「……」

諏訪子と呼ばれたハット帽をかぶっている少女はしかし、返事をしていない。まるで心ここにあらずと言ったような様子である。心配にならないはずがなく、早苗は真に迫るのはマズイと考えて冗談めかして質問してみた。

「どうしました諏訪子様？ ……もしかして恋煩いですか!？」

「……え？ ああ、うん」

——やばい、これはヤバい。幻想郷では常識に捉われてはいけないと常々注意してますが、まさか神様が恋煩いなんて……いや、幻想郷だからこそあり得るんじゃないですか。つまり諏訪子様超頑張って下さいって感じですね。でも一体誰にだろう……。

早苗が悶々と思考に耽つてると諏訪子はいきなり立ち上がった。不意を突かれた東風谷は驚きのあまり後ろにのけ反ってその豊満な胸がやけに強調される。

「もう掃除終わったの？ じゃあ早くお昼にしないと。さ、行く

よ早苗」

「え、待って下さいよ諏訪子様」

箒を片手に早苗は先に歩きだした諏訪子を追う。それはまるで見た目が正反対な姉妹のようで。いつも通り、異変も無い日常の幻想郷でのワンシーンだった。

2

「諏訪子が恋煩い!?!」

和式の居間で早苗と一緒に寛いでパリパリとかじっていた煎餅を、勢いよくバリツと噛み砕いたのは八坂神奈子である。彼女もまた神様であるが、威厳などは今はなく早苗に対する態度も家族のそれである。

4

「ええ、諏訪子様ずっと上の空で……大丈夫でしょうか?」

少し肌寒くなってきた今日この頃。東風谷は少し暖めたお茶をすするとちやぶ台にある受け皿に盛られている煎餅を一つ手にとって口に運ぶ。神奈子は受け皿から煎餅を二枚取って一度にそれらを口に運んだ。

「まあ、大丈夫っちゃ大丈夫なんでしょうさ」

「あ、やっぱり幻想郷では神様も恋愛は有りなんですか?」

「本人以外がとやかく口を出すことじゃないさね」

「あ、そういうものですか」

妙に納得した様子で早苗は頷くとまた茶をすする。

「しかし、諏訪子も年増の割にまだ未練たらたらなのかねえ……」

「神奈子様、鏡を貸してあげましょうか？」

「……丁重にお断りするよ。それで、それがここ三日諏訪子が帰ってこない理由ってことかい？」

「はい、たぶんそうだと思います」

その時、大地が揺れた。別段大きいわけではなく少しよろめく程度の微弱なもの。この居間にある棚が揺れる程度でそこからは何も落ちない程度のそれだが、早苗は言いようの無い不安が胸の内に押し寄せていた。

「早苗、大丈夫かい？」

「え、ええ、このぐらいなら別に気にすることはないですよ」

ちゃぶ台に置いていた飲みかけの茶が入った湯呑みが倒れて中身が零れていた。温めの茶がちゃぶ台から滴って畳に浸みこんでゆく。そして一間置いてから、湯呑みがパンツと小気味の良い音とともに

真っ二つに割れた。

「……諏訪子様？」

言いようのない不安はある種の確信に変わり、早苗はすぐさま立ち上がって神社の裏にある家から飛び出した。

「ちょっと、早苗！ どこに行くんだい！」

「諏訪子様のところですよ！」

それ以上、神奈子の言葉は早苗には届かなかった。

3

6

「はぁ……はぁ……。諏訪子様、どこへ行ったんですか」

風祝の力で風を起こし、それに乗ることで東風谷は飛行して空から諏訪子を探しているが彼女は一向に見つからない。眼下に過ぎ去っていく森や博霊の神社。そのほかにもありとあらゆる場所を回ったがめばしい成果を上げる事はできなかった。

「ちょっと、あんた、さっきから空を飛びまわって何やってんのよ。目ざわりなんだけど。内の神社に対する挑発？ なんなら退治するけど、どうかしらそのところ」

早苗の背後から声がした。その場に滞空して後ろを振り返ると紅白の巫女衣装を着た博霊霊夢がそこにいた。眉間にしわを寄せていかにも不機嫌な表情をしている。更には札まで構えているが早苗にはそんなことに構っている余裕はない。

「諏訪子様を知りませんか？ どこにも見当たらないんです。何でも良いんで知ってる事があれば教えてください」

「諏訪子が？ 別に騒ぐ事でもないでしょうよ。夜になったら帰ってくるからさっさと戻った方がいいわよ。力の無駄遣いは後に響くから」

心底どうでも良いと言うように大きくため息をつき、大げさに首を横に振る霊夢に対して、

「違うんです！」

早苗が一層凄みのある剣幕で否定した。そして飄々としていた霊夢の顔つきが一転して疑惑のそれから真剣なものになる。

「……その程度で騒いでちゃ、幻想郷でやっていけないわよ。目障りだけじゃなくて耳障りもなのね」

「だからっ……！」

説得をしようとしても無駄と分かっているが、納得がいかない。わずかな苛立ちとともに霊夢に反論しようとした早苗だったが霊夢の雰囲気が一変した。まるで何か彼女だけが持つスイッチが次々と

目まぐるしく切り変わっているようだ。目を細め右手を頭に当てている。

「永遠亭の方かしら……」

それは理屈など関係のない直感。しかしそこが霊夢が幾度も異変を解決してきた最大の武器である。

「ありがとうございますっ！」

それを理解した早苗は可能な限り風を巻き起こし、小さな台風となってその場から離れる。それを見送る霊夢は物言わず、ただ風祝の巫女が行った空を眺めた。そして何事も無かったかのように自分の神社へと戻っていった。

「なに……これ」

いつもより倍近い時間をかけて迷いの森を抜けた先にあったのは、とある月人が医者代わりに活動している永遠亭ではなかった。

荒野だった。生命の息吹を感じないむき出しの大地からは数々の円い石柱が建ち上りこの一画だけ、森の中ではなく果てのない荒野としてただ幻想郷の中にあった。

「結界？ でもなんでこんな……永遠亭すらない……。博霊の巫女が言ってた事はやっぱり本当だった。諏訪子様はこの異変に巻き

込まれたから行方が分からなくなっていたという事ですか」

状況が今いち把握できない早苗は周りを見渡す。石造りの円柱が無造作かつ無数にならぶこの荒野で唯一目立つものがあつた。前方。円ではなく十字架を模したような作りになっている印象的な石柱だ。赤い稲妻がまわりつくように周囲に発生していて時折、小さな炸裂音が聞こえてくる。

「永琳さんや、鈴仙さんもない……みんな巻き込まれたという事？」

しかし、それが間違いであると認識する。

先端が十字架を模した石柱に諏訪子がまるで生贄のように掲げられ、磔されたように両の腕を左右に伸ばして宙に固定されている。長さは数十メートル。飛べば大した距離ではない。

「す……諏訪子様っ!？」

初速が最高速度。一秒でも惜しいというが如く早苗は風を巻き起こして磔にされている諏訪子のところまで飛んでいく。が、あと十メートルを切ったところで何者かの弾幕によって進路を阻まれた。唐突に出現した弾幕に反応が追い付かずに幾つかに掠ってしまふ。

空中で姿勢を制御しなおして体勢を整える。そして上方を確認する。

「誰!？」

「輝夜、本当に仕事してるのかしら。この結界に誰も入れるなんて言ったのに」

早苗と諏訪子の間に立ちはだかったのは他でもない永遠亭の主、八意永琳だった。

5

「で、そこをどいてくれるかい、輝夜」

「寝てたら一人通しちゃったしこれ以上通したら、私が永琳に何をされるか分かったものじゃないわ」

迷いの竹林、鬱蒼と竹が生え伸びている道なき道の途中で、神奈子が出会ったのは蓬萊山輝夜だった。輝夜は大きい欠伸をして心底眠そうに神奈子の前に立ちはだかる。

「じゃ、どうしても通さないと？」

「永琳とあなた。どっちが危ないかは比べるまでもないでしょう」

その言葉を聞いた神奈子は前方に右手をかざす。ただ力なく開かれたその手を、力の限り握りしめる。風切音とともに落下したのは御柱。それは輝夜を押しつぶさんとして、彼女がいた地面に轟音とともに小規模のクレーターを作った。

しかし押しつぶされたはずの蓬萊人は自分が出れるだけのスペース分、御柱をゆっくりと持ち上げると何食わぬ顔で再び神奈子と相対する。

「今回の異変は今までとは違うって分かってる？　今までなら霊夢が元凶をこらしめて、その後はわだかまりも無く幻想郷があったけど今回は例えどっちが勝ったとしても変わる。ある種の分岐点なの、ここの」

「それは早苗と永琳の事を言ってるのかい？」

「ピンポン！その通り！　だから、結果がどう転ぼうと変わることはない。大人しく待ってた方がいいのよ。加勢するのも面倒くさいし」

「……それで、私が大人しく引き下がるとでも思ってたのかい？　分岐点なら尚更行かなきゃいけないじゃないのさ」

「ぶっちゃけ、ただの年増に私をどうこうできるわけがないでしょうが。何をしても変わることには変わりはないのに行動を起こすなんて馬鹿馬鹿しい。大丈夫、いざとなったら本気出して相手してるわ」

ビキリ、と神奈子の額に青筋がはしる。

「下手な神よりも年上のお前が、神を年増扱いたあ良い度胸だ。」

いざとなる時にしてやるから面貸しな」

「嫌よ。やっぱり面倒くさい。まあ、それでもあなたの方が年上でしょう。神様の中でも上の上ぐらいなんでしょう？ 別にやるんならやるけどお互いただじゃ済まないのは分かっていると思うんだけど」

「……………分かった。通らないからもう面倒くさい罵り合いは無しさね」

勢いよく地面に腰を下ろした神奈子は懷から杯を取り出して、酒を注ぐ。

「あ、私も私も。何か面白い話でもしましょう。肴には丁度良いでしょう？」

「何で、諏訪子様を捕えたんですか？」

「誤解しないでよ？ 交渉の末、諏訪子は自分から来たんだから。で、あなたが分かるように説明すれば崇り神である諏訪子は何故か力が増して来たのよ。本来、神は信仰などの条件下を除き力が強くなるなんてありえないんだけど。そして諏訪子は自分自身の力を制

御できずにいる。

例えるなら、数時間前に地震があったでしょ？ あれも諏訪子の暴走した力の一端。完全に暴走してしまえば幻想郷は崩壊する」

「つまり、諏訪子様がこのままいけば幻想郷が崩壊する恐れがある。だから今のうちに手を打つ、という事ですか？」

――何が恋煩いだ。馬鹿馬鹿しいにもほどがありますよ。諏訪子様の本当に気持ちに気づけなかった。諏訪子様は苦しかったはずだ。死ぬと言われて自らその道を選んだ諏訪子様の気持ちを察するどころか何もしてあげられなかった……。

「物分かりが良くて助かるわ。あ、信仰云々は無駄よ？ 力が上とするのは確かだけど元凶は洩矢諏訪子という祟り神そのもの。もし信仰が減っても根本的な解決にはならないわ」

「なら、今回の異変の核心は諏訪子様ではなく、諏訪子様の力が増大した原因じゃないですか？」

「その通りよ。でも大して時間も無いの。迅速かつ確実に阻止するにはこれが一番」

「では、そこで礫になってる諏訪子様をどうする気ですか？ 答えによっては……」

「答えようによっては……何かしら？ たかが人間風情が月人に

敵うとでも？ 身の程を弁えなさい。ちなみに説明しておくと純粋な力の塊に変換して私の支配下に置くのよ。もちろん今の人格はリセット。洩矢諏訪子には神として死んでもらうわ」

八意永琳は笑みは浮かべていない。ただ冷酷な無表情が早苗を上から見下ろしている。それは哀れみでも同情でも無い。ただ洩矢諏訪子は消えるのが当然。永琳にしてみれば当たり前のことをしているのに感情なんて働くはずがないのだろう。

「あああああああああああああああ！！」

早苗は台風となる。その風は今の彼女の憤怒を如実に表しているようにしかし永琳は眉ひとつ動かさない。吹き狂う風は周囲にある石柱を強引に引き抜き、弾幕として永琳に牙をむく。

危険が迫る中で永琳はただ弓を構え矢を番える。そして放つ。彼女が放ったのはたった一本の矢。早苗の即席弾幕より質、量ともにはるかに劣っているのは自明の理。なのに矢は石柱群を貫きその先にいる早苗へと飛来する。

「なっ!？」

「スペックが違うのよ、人間」

驚きを隠せない早苗はそれでも今の感情を殺して前へ踏み出す。もとより相手が上手なのは当たり前だ。この程度で隙を見せるなんて言語道断。――絶対に取り戻す。それだけを胸に秘めて早苗は飛翔する。

「秘術——グレイソーマタージ！」

「天丸——壺中の天地」

自分が展開した弾幕で相手の弾幕を回避、相殺しつつ一撃を与え
るべく更なる弾幕を展開していく。極限にまで集中し弾幕の隙間を
見つける。それこそが突破口であり諏訪子を助けるための近道その
もの。今までやってきた通りにやっていけばそれで大丈夫。

しかし余裕を保っていられるほど相手は弱くなかった。弾幕を見
れば分かる。相殺をして突破口の発見を狙っているこちらに対して
向こうはほぼ三手先、四手先を読んでいると言っても良いほどに次
第に逃げ道が塞がっていく。

「ふっ！」

まだ少し余力の残ってるグレイソーマタージで上方の弾幕を相殺。
これでグレイソーマタージは完全に効力を失ったが問題はない。短
く息を切って身を反転させながら上方へ加速。永琳の弾幕は掠りは
すれども直撃はない。いける。

「はああああああ！」

身を前に倒す。前傾よりも深く、体の表面積を出来る限り少なく
して特攻を仕掛ける。別に格上の相手と真っ向勝負して勝てば良い
わけではない。諏訪子さえ助けられればそれでいいのだ。そして永琳
のスペルカードが効力を失って道が完全に開けた。速さで負ける気
はしない。永琳の右方向を飛び抜け、諏訪子が礫られている石柱へ
一直線へ向かう

「私を無視して諏訪子だけを助けるつもり？　甘く見られたものね。葉符——壺中の大銀河」

「くっ……」

無視を決め込む。最悪、このまま負ける可能性もあるが自分を信じていない者に勝利は来ないから。

もう肌で分かる。後ろから途轍もない数の弾幕が展開されていて戻る道はおろか、これから進む道さえ閉ざされると。そうなる前に諏訪子の元へ……元へ。手を伸ばせば届きそうなのに届かなくて。だから風を起こして全速力で向かっているはずなのに進まない。

左右を光線型弾幕が通り抜けて完璧に封鎖されてしまう。上下を弾丸型弾幕が通過していく。次々と選択肢を殺されていくのが不思議でならない。そこで気づいた。もう風を起こすほどの力が残っておらず浮遊するだけで精いっぱいだったのだと。

——力の無駄遣いは後に響くから。

なぜか、今になって霊夢の声が聞こえてきた。

「タッチ」

背後に焼けるような強い痛みと衝撃。そして手は届くことなく空から堕ちた。

——哀しい。悲しい。悔しい。クヤしい。今は私だけしかないのに。私が負けければ消えてしまうのに。

家族の一人すら守れないで何が現人神。何のための風祝。誰が東風谷早苗。いざという時に弱いままじゃ昔と何も変わらないじゃないですか。もう何でも良い。何でも良いから、諏訪子様がいなくなるなんていう現実を否定できるだけの力が欲しいんです。

永琳の弾幕に被弾した東風谷早苗は頭から落下しもう復帰できないほどのダメージを負ったはずだった。しかし八意永琳は見た。

下方では青と赤の五芒星が煌めき、強く輝いているのを。そしてそこから残っていないはずの余力で強風を巻き起こして永琳と同じ高さまで昇ってきた東風谷早苗を。

「このスペルカードは……奇跡を起こすための準備のようなものだったかしら、確か」

弓に矢を番え、そして矢そのものに弾幕の力を付与させて放つ。たったそれだけで早苗が展開した弾幕は一条の軌跡によってほとんどが消し飛ばされてしまう。

「ひとつ質問があります。あなたは何で諏訪子様を犠牲にしようと思ったんですか？ 他の方法だってあるはずじゃないですか」

「言ったじゃない。時間がないから」

「それがあなたの答えですか？」

「たかが百年も生きていない赤ん坊にとやかく言われる筋合いはないわ」

「赤ん坊は赤ん坊なりに、大人より優れた答えを出します」

「例えば？」

「諏訪子様を助けて、幻想郷も壊させない」

「綺麗事を」

「懂れるから綺麗なんですよね？」

「……黙ってなさい。何も知らない赤ん坊が」

そこで初めて永琳は表情を作る。怒りでも悲しみでもなく苛立ち。――何も知らないのにズカズカと土足で踏み込んでくる。何も知らないのに平気で絵空事を言って変な期待を脳裏に過らせる。そんな事になるなら最初から切り捨てておけばいいのに、そうしたのに、そうさせてくれないのは何でよ……。

「お師匠様、私だって力になります！　せめて準備だけでもやらせて下さい。幻想郷を壊したくないのは私だって同じです！」

頭にまるで飾りのような長いウサギの耳を生やしてブレザーを着た少女は永琳の背中にすがりつく。しかし永琳は振り向くことなく背中を向けたままウサギの耳を生やした少女に言う。

「鈴仙、あなた分かってるの？　今回の異変は違う。幻想郷の崩壊に直結してるのよ。」

「じゃあ、なんで私は今までお師匠様について来たんですか！　この時のようなためじゃないですか！　輝夜さんが協力出来て私にできない道理は何ですか！」

「あなたの手に余るからよ。それに、話してなかったけど今回の異変の元凶は……幻想郷よ。洩矢諏訪子の力を増幅させている原因は幻想郷なの」

「え……」

「何故かは分からない。今、紫が必死に探っている。境界の番人が出れない以上私が出るわ。全ては秘密裏よ。今は霊夢にも話していない」

鈴仙は困惑を隠せないのか、表情が見る見るうちに曇っていく。永琳には分かる。鈴仙が掴んでいる自分の服の裾ごしに彼女の手が震えていることが。

「あなたは安全なところにいなさい。博霊の神社なら大丈夫でしょう。霊夢には悟られないように。いざとなったらすぐ外に逃げられる」

「すいません。私、頭が悪いのでお師匠様の言ってることが分かりません」

「そう……そうね知らない方が良いこともあるもの。じゃあねうどんげ」

永琳は優しく鈴仙の手を解くと永遠亭の廊下を歩み始める。茫然と立つ鈴仙に対して永琳は最後まで振り返らなかった。

9

風が吹き荒れる。それは離れたところにいる永琳の銀髪を強く揺らすほどに強く猛々しい。その中で早苗は言う。

「私なら、全部抱えたうえで飛んでやります！ いざこざなんて知りませんよ……所詮、十数年生きただけの赤ん坊ですからね。でも何も知らないから綺麗事を言える。幻想を現実に変える程度の奇跡、起こしてみせます！」

「世迷言はこれを越えてから言いなさい……天網蜘蛛網捕蝶の法」

永琳が隙間すら見つける事が困難なほどの密度の弾幕を展開する中で、早苗はただその困難を実行しているだけ。本当の必要最小限。それはもはや理屈ではなく直感。数多の光線と弾幕がこの荒野を全

て埋め尽くす程度に飛び交う。進んで退路がないなら止まって退路を見出す。

それだけで永琳の最大の弾幕をやり過ぎし、効力が切れたところで全霊を打ち込むのだろう。しかしそんな甘い考えを通用させるわけにはいかないし、自分の全力はこの程度のものではない。

早苗は身を翻す。目の前に自分の背丈よりも大きい弾幕が展開していても相殺はせずに避ける。避ける。もとより既に力尽きていたのを無理やり動かしている体だ。被弾して服が焼け焦げようが足が麻痺しようが腕の感覚が無くなるうがどうでもいい。ただ意識があつて最後の一撃を当てるだけの余力さえ残っていればそれでいい。

スペルカードは使えて1枚。上下前後左右、全ての方向の情報を把握して安全地帯を見出す。そして、永琳のスペルカードの効力が切れた。

「嘘っ……」

「最終奇跡——天を穿つ日」

早苗が持つ祓い棒、それが早苗の持てる全ての力を喰い風を纏う。そして祓い棒を芯として巨大な風の槍となる。

永琳は戦慄する。あれはある意味次元が違う。紅魔の吸血鬼のそれと同等どころかそれ以上。今持てる手段であれを防げる術はない。回避なんて間に合わない。仮にも風祝の力の風を纏ったもの、速度は想像以上と考えた方が良く。そして早苗は全霊の槍を投擲する。

「諏訪子様は返してもらいます。そして、諏訪子様と幻想郷を救

うために協力してください」

「私の負けよ……私の意識が無くなったらこの結界は解けて元の永遠亭に戻るわ。紫を呼んで諏訪子を保護してもらいなさい。手荒な方法になるけど悪いようにはならないわ」

「ありがとうございます」

そして奇跡の槍が永琳に直撃する。

9

「で、要は幻想郷が危ないから、私にどうにかしろと？」

「はい、是非よろしくお願いします！」

二日後。博霊神社境内。掃除をしていた霊夢に対して訪問者の早苗は彼女に微笑みかける

「永琳は？ あんたコテンパンにしたんでしょ？」

「輝夜さん、鈴仙さん、因幡さんたちが看病してます。出来る限り調整しましたし明日には完治するんじゃないですか？」

「あ、そう。流石月人。でも今回の原因は不明で、その元締めが幻想郷。どうやって相手をしたらしいのよ」

呆れかえる霊夢に対して早苗は袖の中を探るとそこから一つの缶を取り出した。蓋を開けると茶葉の匂いが仄かに漂ってくる。霊夢の眉がぴくりと動いた。そして早苗は続けて袖の中を探ると今度は酒が収まっている一本の瓶を取り出した。霊夢の鼻孔が小さく膨らむ。

「ここに取り出したるは幻想とならずに、外の世界に残り続けた至高の逸品と称しても謙遜のないお茶とお酒です。味は……まあ、飲んだことはないから保障できませんが」

「それ、自分で詐欺と言ってるようなものよ」

霊夢の後ろの空間にスキマができる。そこから白いレースの手袋をした人の手が出てくると続いて上半身が出てくる。スキマに体重を預けているような格好で登場したのは、八雲紫その人。両手で霊夢を背後から抱くと目の前にいる早苗に艶やかに微笑みかける。

「御機嫌よう東風谷早苗さん。永琳を倒したのは見事としか言いようがありませんわ。それで諏訪子はこちらが張った結界の中で隔離していますけど結界も長くは持ちません。何か策はあって？」

「……」

暗い表情をしてだんまりを決め込む早苗を見た紫は同情するようなため息をつく。

「ああ、もう。暑苦しいわよ紫！ 離れなさい！」

「やだ、気持ちいいもの。あ、ちなみに早苗の持ってきたお茶とお酒は本物よ。私もずっと探していたんだけど見つからなかったの。まさか守矢が管理しているとは思ひもなかったわ。そりゃ札とかで魔除けしておけば私は近づけないのは当然」

「あんた、私の魔除けをことごとく蹴散らしてるくせに何を言ってるの」

「土地と神、そして信仰の力を合わせた魔除けはそれなりに強力だってことよ」

今度は霊夢が黙る番になった。凶星を射られた霊夢に同情するかわのような目で見える早苗は急に閃いたようにパン、と手を合わせる。

「じゃあこうしましょう。異変が終わったらみんなで宴会をしましょう。このお酒とお茶で。もちろんみんなの中には諏訪子様も含まれています」

一息の間、博霊神社に静寂が訪れた。しかしその後。霊夢は早苗の袖を強引に引っ張ってズカズカと歩いていく。

「えっ……ちよっ！？ いきなり何ですか！」

「……最高級の酒と茶が飲めるのなら異変解決なんて安いわ。さっさと行くわよ早苗」

駆け足で神社から離れていく二人の巫女を紫は見ている。

「さて、幻想郷は滅びを望んでいるのかしら？ それとも……」

境界の番人は独りごちるとスキマの中へと戻っていった。

東方土着争奪（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1460v/>

東方土着争奪(仮)

2011年10月8日05時00分発行